

アクティブ・ラーニングにおける生徒の自己肯定感の変容

～『学び合い』の授業を通じた事例的研究～

○永田 倫之(上越教育大学教職大学院)

西川 純(上越教育大学教職大学院)

(j275635j@myjuen.jp)

要約

本研究の目的は、アクティブ・ラーニングにおける手法の1つである『学び合い』の授業を通して生徒の自己肯定感が向上するの否かを明らかにすることである。アンケート調査から質問に対する回答が調査期間内で変化し、生徒の自己肯定感が上昇していることが分かった。またアンケート調査から抽出された事項を裏付けるための発話・行動分析でも生徒の自己肯定感が上昇している様子が見受けられた。これらより、生徒の自己肯定感は向上することが明らかとなった。

キーワード：アクティブ・ラーニング、『学び合い』、自己肯定感

I 問題の所在

文部科学省(2009)は子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題として学童期の小学校高学年において、自己肯定感の育成をあげている¹⁾。国立青少年教育振興機構(2014)は、「我が国の青少年の自己肯定感は、諸外国に比べて低く、青少年の健全育成にとって、大きな課題の一つとなっている。」と述べている²⁾。また同機構が行った自己肯定感の調査では「今の自分が好きだ」などの6つの質問項目に「とても思う」「少し思う」という回答が小学4年では63.9%、小学6年では53.8%、中学2年では31.9%、高校2年では27.6%であった。このように、小学校高学年段階で自己肯定感を育成していかなければいけないが、諸外国よりも低く、学年が上がるにつれて低くなる。加えて中学校や高校へ進学するにつれて、自己肯定感は低下しているのが現状である。

教育再生実行会議(2015)は小・中・高等学校から大学までを通じてアクティブ・ラーニングへと授業を革新し、学びの質を高め、その深まりを重視することで、社会で求められる資質・能力の素地として自己肯定感を醸成していくことが重要であると述べている³⁾。文部科学省(2012)はアクティブ・ラーニングを「教員による一方的な講義形式

の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決型学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法」と定義している⁴⁾。

アクティブ・ラーニングにおける手法の1つとして西川が提唱する『学び合い』が挙げられる。西川(2015)は『学び合い』とは認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るアクティブ・ラーニングだと述べている⁵⁾。西川(2010)によると『学び合い』は「学校は多様な人と折り合いをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場」という学校観、「子どもは有能である」という子ども観、「教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備で教授は子どもに任せるべきだ」という授業観の3つの考え方に基づいた教育実践である⁶⁾。

『学び合い』に関する研究はこれまで学級での『学び合い』や異学年での『学び合い』、全校での

『学び合い』など生徒規模の変化による教育効果の検証や『学び合い』授業時の教師の考え方や行動の変容に関することなどが多岐にわたって存在する。しかしアクティブ・ラーニングの1つである『学び合い』の授業を通しての自己肯定感に関する研究は管見の限り見当たらない。

II 研究の目的

本研究ではアクティブ・ラーニングの1つである『学び合い』の授業を通して、生徒の自己肯定感は向上するのか否かを明らかにすることを目的とする。

III 研究の方法

1 調査対象

新潟県公立中学校

1年 29名 2年 35名 3年 39名 計 103名

2 調査期間

平成 27年 10月から平成 28年 3月

3 調査方法

単学級『学び合い』英語の授業で、学習者全員の発話をボイスレコーダーで記録した。また授業の様子を2台のビデオカメラで記録した。加えて、生徒に対し自己肯定感に関するアンケート調査を実施した。

4 分析方法

〈分析 1〉

調査対象にアンケート調査を複数回、実施した。自己肯定感に関する変容を明らかにするため、回答内容がどのように変化しているのかを分析する。(質問項目)

Q1, 中学校の英語の授業がきっかけで、クラスの人と話すことが増えましたか。

Q2, 中学校の英語の授業がきっかけで何か自分に自信ができましたか。

Q3, 中学校の英語の授業がきっかけで友達ができたことはありますか。

〈分析 2〉

アンケートから抽出された事項の裏付けとなる生徒の発話が単学級『学び合い』英語の授業時に、どれだけ又、どのように発生しているのかを検証するため、生徒の会話を量的・質的側面から分析をする。

〈分析 3〉

アンケートから抽出された事項の裏付けとなる生徒の行動が単学級『学び合い』英語の授業時に、どのようなものなのかを検証するため、生徒の行動を量的・質的側面から分析をする。

IV 結果と考察

アンケートの質問項目の回答が調査期間内で変化し生徒の自己肯定感が上昇していた。また発話・行動分析でも生徒の自己肯定感が上昇した様子が見受けられた。これらよりアクティブ・ラーニングでの手法の1つである『学び合い』の授業を通して、生徒の自己肯定感は向上することが明らかになった。

※詳細は当日発表する。

引用・参考文献及びWebサイト

- 1) 文部科学省：「子どもの徳育の充実に向けた在り方について(報告)」, 2009.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286156.htm
(平成 28年 11月 15日 閲覧)
- 2) 国立青少年教育振興機構：『青少年の体験活動等に関する実態調査(平成 24年度調査)報告書概要(訂正版)』, 2014.
<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/84/File/gaiyou.pdf>
(平成 28年 11月 15日 閲覧)
- 3) 教育再生実行会議：「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について(第七次提言)」, 2015.
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/saisei/pdf/dai7_1.pdf
(平成 28年 11月 15日 閲覧)
- 4) 中央教育審議会：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」, 用語集, 2012.
- 5) 西川純：「アクティブ・ラーニング入門」, 明治図書, 2015.
- 6) 西川純：「クラスが元気になる!『学び合い』スタートブック」, 学陽書房, 2010.